

第三節〈実践編〉

1 現代史料と研究

現代尼崎の工業史を 説明する



尼崎市域南部の臨海工業地帯 昭和六十二年撮影

はじめに 近代以降の尼崎の歴史のうえで、工業

史が重要な位置を占めることは言うまでもありません。尼崎の通史を描く『図説尼崎の歴史』の近代編・現代編は、時代ごとに工業史に関する項目を立て、尼崎の製造業の変遷についての歴史的解説を試みました。ここでは、『図説尼崎の歴史』現代編の工業史に関する原稿作成過程を事例として紹介します。

近代の工業史について、『尼崎市史』第三巻がすでに一定の解明と評価を行なっているのに対して、現代は『尼崎の戦後史』が昭和三〇年代までしか叙述しておらず、時代的な制約から記述内容も限定的です。つまり、現代編の工業史分野は叙述や評価の基本部分において全面的に依拠できる文献がなく、一から調べて流れを解明し原稿化していく必要がありました。

原稿化の手順①―先行研究の確認と検証 調査・研

究に際して、先行研究の確認と検証は欠かすことのできないもとも基本的な作業です。戦後尼崎の工業史の分野では、『尼崎の戦後史』の記述が限定的であることはすでにふれました。そこで次に、この分野の市史以外の先行研究文献の確認と検証を行います。文献を検索し、さらにそこにおいて参照・論及されている先行文献をチェックしていったところ、尼崎あるいは阪神地域の現代工業史をテーマとする重要な研究文献として、次の刊行物があることがわかりました。

『市研尼崎』第二二号「特集 尼崎の産業構造」（尼崎市調査会、一九七九・六）

増谷裕久編『阪神間産業構造の研究―尼崎地域産業の歴史と現状―』（関西学院大学産研叢書Ⅱ、法律文化社、一九八七）

河野通博・加藤邦興編『阪神工業地帯―過去・現在・

未来―』（法律文化社、一九八八）

いずれも実績のある研究者グループによる共同研究著作であり、重厚長大・基礎資材型分野中心の尼崎の製造業と日本製造業全体の構造転換の関連性や、尼崎の鉄鋼業に着目してその特質を分析する手法など、重要な論点が共通して提示されています。その一方で、いずれも論集形式であることからやや論点が分散しており、しかも一九七〇～八〇年代の著作であるため、バブル経済崩壊、阪神・淡路大震災という大きな変化がある九〇年代から二一世紀初頭に関する記述がなく、この時代までを見通した現代尼崎工業史の原稿を作成するにあたっては、これらの文献を参照するだけでは不十分であることも明らかとなりました。

原稿化の手順②―基礎データをそろえる 以上をふ

まえて、現代尼崎の工業史を全体的に分析し理解していくため、まず基礎的な統計データを整理し、経済の流れを実証的に把握する作業に取りかかりました。

尼崎の製造業が、アジア太平洋戦争後の復興期から高度経済成長期にかけて隆盛を迎え、近年は停滞・後退傾向にあることは、ある程度尼崎の経済事情に通じている人であれば周知のことです。であるとすれば、どこかの時点で上昇から停滞・下降への転換点があり、何らかその転換の要因があるはずで、この転換点前後の流れと要因を説明することこそが、今回の原稿作成の最重要ポイントとなります。この転換点を漠然とイメージするのではなく、客観的数値により把握するため、基礎的統計データの整理が必要となるわけです。

さいわい、この時代・分野の統計データは、比較的に利用しやすい刊行物にまとめられています。昭和三十六年版（一九六二）以降、毎年の主要統計を掲載した『尼

『**尼崎市統計書**』が刊行されており、それ以前については、『**尼崎市史**』第九巻統計編にまとめられています。

今回はこれらの刊行物に加えて、そこに収録される工業統計の元データである工業統計調査結果も適宜参照し、全国的な経済動向との比較や物価指数による補正を行なうため、『**完結昭和国勢総覧**』や『**日本統計年鑑**』（政府刊行物）等の全国統計も用いました。

『**図説尼崎の歴史**』現代編の原稿作成にあたり、これらの統計書を用いて作成したのは、次の二種類の統計グラフです。ひとつは、工業の量的変化を把握するため、**尼崎**全体の事業所数・従業員数・製造品出荷額等総額の経年変化をまとめたもの。もうひとつは、分野構成の変化を把握するため、製造品出荷額等総額の業種別構成比を経年比較したものです。本項末尾に図版とともに掲げたのは、現代編の第三節「転換期を迎える**尼崎の経済**」に掲載したグラフで、石油危機以降の時期を五年間隔で区切っています。石油危機以前の時期についても、現代編第二節「産業構造の転換（一）」に同様のグラフを作成・掲載しました。

原稿化の手順③―データを分析する これらのグラフから、現代**尼崎**の工業の流れを数値的に把握することが可能となりました。高度経済成長期まではすべての指標が右肩上がりに上昇する成長期、ドル・ショック、石油危機を境に停滞に転じ、バブル経済が崩壊した一九九〇年代以降はすべての指標において下降する後退期となります。また分野構成の面では、重化学工業系が圧倒的に大きな比率を占めており、ことに高度経済成長期には基礎資材型の典型である鉄鋼関係の比重が大きいものの徐々に構成比率を低下させ、かわって機械製造業の比率が時代とともに増していきます。

原稿化の手順④―年表を作る 次に、現代**尼崎**の工業の流れをさらに具体的に把握するため、主要な関連事項を拾い出して時系列化した年表を作成します。

数値の変化は実証的ですが、その一方で抽象的です。たとえば分野構成における鉄鋼業の比率の変化について、数値に加えてどの鉄鋼メーカーがどの時代に生産を行ない、工場がどの時期に縮小あるいは廃止されるのかという例示的叙述があれば、より具体的に理解することができます。年表作成は、こういった具体的な事象把握や例示のうえで必要な作業であるわけです。

拾い出しの作業は、主として『**尼崎市史**』第一三巻及び『**尼崎地域史事典**』掲載の年表から行ない、適宜他の参考文献も参照して事項を補ったほか、これらの年表刊行後の時期については、新聞各紙の年末に掲載されるその年の主要できごと一覧などを参照しました。本項末尾の図版は、作成した年表から石油危機以降の時代の**尼崎**の製造業をめぐる主要な事象を選び出し、地図上に示したものです。青色が工場竣工などプラス側面の事象、薄赤色が廃止や操業停止などマイナス側面で、一見すると両者は拮抗しています。しかしながら内容を確認していくと、マイナス面で関西電力や神戸製鋼など**尼崎**を代表する企業の工場が次々と閉鎖あるいは転出している一方で、プラス面はほとんどが行政による工業団地建設であったことがわかります。

このように、年表化や図版化により、より具体的に現代**尼崎**の製造業の変化を把握することができました。

原稿化の手順⑤―分析対象を絞る 以上により大まかな流れを把握することができたので、次に変化の要因を分析していきます。すべての業種・企業を分析するのは時間的・物理的制約から現実的ではないので、

て考察したところ、六社にはいくつかの共通点があることが明らかになりました。多くが独自の技術力を有する中小企業であり、戦後復興期から高度経済成長初期に激しい労働争議が頻発したこと、その後の大企業系列下への再編や縮小、廃止、倒産といった点です。企業系列との関係を軸に高度成長期以降の動向を類型化すると、**尼崎製鉄**を除いて次の三つにわかれます。

○大企業の系列下に再編ののち廃止

尼崎製鋼・**尼崎製鉄** 大谷重工業

○大企業の系列下に再編され生産分野を特化して存続
 大同鋼板（現日鉄住金鋼板） 日亜製鋼（現日新製鋼ステンレス鋼管）

○企業内において生産分野特化・工場再編
 住友金属工業（現新日鐵住金）

こういった動向をみていくなかで、ふたつの背景要因がポイントであることがわかってきました。

ひとつは、戦後日本鉄鋼業界の課題としての鉄鋼合理化と再編です。戦後復興から高度経済成長へという流れのなか、日本経済を牽引すべき鉄鋼業が国際市場における品質・コスト競争に打ち勝っていくためには、鉄鋼一貫（高炉による製鉄Ⅱ鉄鉄供給から製鋼、鋼材加工までを同一企業内で行なう業態）の大手メーカーを中心に生産体制を合理化し、計画的積極的な設備投資のもと高品質・低コストの鉄鋼製品を供給していくことが不可欠でした。多くが高炉を持たず平炉や電気炉により生産を行ない、資本規模が小さいため老朽化した設備の更新がむずかしく、加えて強い労働組合が経営に対する発言権を有する**尼崎**の鉄鋼企業は、整理再編、あるいは淘汰されるべき存在だったのです。

もう一点は、時代とともに**尼崎**の工場立地の優位性



写真家・故片岡敏男氏が昭和57年に撮影した神戸製鋼**尼崎製鉄所**（旧**尼崎製鉄**）。高度成長期以降の臨海工業地帯における鉄鋼業停滞を象徴する写真として、『**図説尼崎の歴史**』現代編に掲載しました。

対象を絞り、とくに鉄鋼業を集中的に分析することにしました。その理由は、主として次の三点です。

○**尼崎**がかつて「鉄の町」と呼ばれたことに象徴されるように、鉄鋼業が代表的業種であったこと

○分野構成における鉄鋼業の比率低下と、**尼崎**の製造業全体の停滞・後退の間に相関関係がみられること
○先行研究が鉄鋼業を重点的に取りあげており、その手法や分析結果を参考にできること

具体的に分析対象とした**尼崎**の主要鉄鋼メーカーは、**尼崎製鋼**・**尼崎製鉄**、**尼崎製鉄**、**大谷重工業**、**住友金属工業**、**大同鋼板**、**日亜製鋼**の六社です。

先行文献や『**尼崎地域史事典**』の各企業項目を参照し、さらに社史が刊行されている場合はこれも参照し

たつの有利な条件が失われるなか、製造業の重点は原燃料費のコスト比率が低く製品付加価値が高い、国際的競争のなかで日本の技術力を生かすことができる家電や自動車などの機械工業分野に移行します。こういった新たな製造分野は、大阪や**尼崎**のような狭あい化・旧式化した場所ではなく、主として地方の新興工業地帯に展開していきました。**尼崎**では鉄鋼などの基礎資材型分野が後退するなか、相対的に機械工業分野が比重を増していくものの、**尼崎**の製造業全体としては国内地位を低下させ、停滞・後退局面に陥ります。そのことが、都市全体の経済や活力に直結する**尼崎**の都市構造であったと、評価することができます。

おわりに 以上、『**図説尼崎の歴史**』現代編の原稿作成を事例として、現代**尼崎**の工業史というやや大きなテーマについての調査・分析手法と手順をご紹介しました。どのような対象であっても、こういった基本作業をふまえて実証的に考察していく必要があるということですを、ご理解いただければと思います。

〔注〕

（一）『**完結昭和国勢総覧**』全四巻（東洋経済新報社編・刊行、一九九一）。第一次国勢調査が実施された大正九年（一九二〇）から昭和六三年までの国勢統計を網羅的に集成したもの。これ以前の統計については同じく東洋経済新報社による『**明治大正国勢総覧**』（一九二九、一九七五復刻）がある。さらに、収録対象分野がやや異なるものの、同様の長期基本統計数値を得られる刊行物として、『**日本長期統計総覧**』全五巻（総務庁統計局監修、日本統計協会、一九八七・八八）がある。

〔執筆者〕地域研究史料館（担当 辻川敦）

泉徴収の方針を打ち出しました。しかし、この方針は、尼崎地方労働組合連絡協議会などによって反対されます。労働組合と市の間で交渉が行なわれた結果、納税に協力すること、完納者への直接還元と社会施設建設による間接還元を行なうことで合意し、昭和二十八年四月一日に「尼崎市社会公共福祉施設対策協議会」が設置されました。今回取りあげる文化会館建設計画は、ここから始まります。

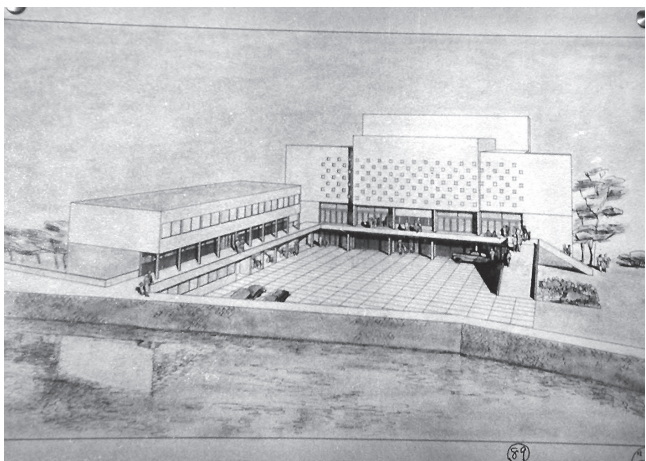
研究対象を選ぶ 一九五〇年代に入ると住宅復興が徐々に落ちつき、地方博覧会が各地で開催され、ようやく公共建築の建設計画が動き出します。具体例として、昭和三〇年に尼崎市昭和通二丁目に竣工した尼崎市文化会館（写真１）と、四年後の昭和三四年に同会館東側に竣工した尼崎市立図書館（写真２）があります。この二つの建物の設計は、NAU大阪支部によるものです。本項ではこれらの建物に着目して、戦後初期尼崎における公共建築物建設の背景をさぐります。

NAUは、日本建築文化連盟と日本民主建築会を中心に、昭和二十二年六月二八日に結成された建築運動団体であり、活動の全盛期は昭和二十二年から二六年で、約八〇名以上の建築家が所属していました。「建築を人民のために建設し人民の建築文化を創造する」をスローガンに、東京を中心に設計活動を展開し、昭和二十四年から二七年にかけて全日本造船労働組合会館、新日本文学会館、全銀連会館、八幡製鉄労働会館を手がけています。NAU大阪支部は、地方支部のひとつとして昭和二十二年一月に「国民のための建築」の創出をめざし結成されました。

文化会館建設に関する史料をもとに 文化会館建設については市建築課の『工事関係書』三綴りと『支払

関係書』一綴りが公文書として市で保管されており、加えて地域研究史料館が所蔵する尼崎市文化会館建設関係史料に『尼崎市社会公共福祉施設対策協議会』という簿冊があり、これらをもとにたどりま

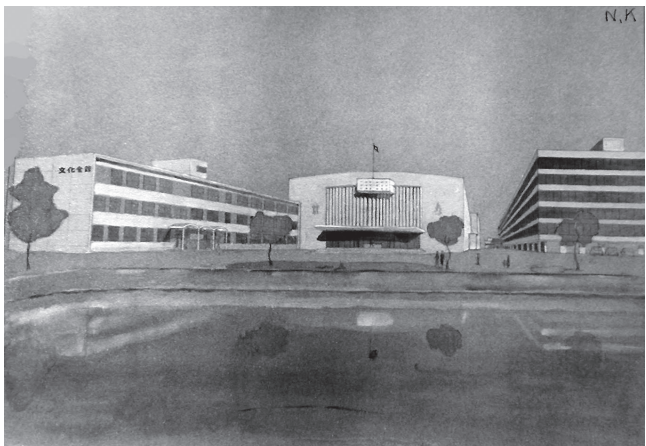
協議会の構成メンバーは、尼崎地方労働組合連絡協議会・尼崎地方労働組合協議会・総評尼崎地方評議会の代表、参与、市の関係者、約二〇名でした。第五回協議会（昭和二十八年六月一日）において、公共福祉施設の建設を望む意見が上がり、文化会館、労働会館、公会堂、勤労者住宅、総合運動場、総合遊園地、児童会館、憩の家の建設が検討されました。「1. 全市民の等しく要望する施設、2. 全市民が等しい立場で利用できる施設、3. 尼崎市に必要欠くべからざるものでありながら現存しない施設」という観点から、文化会館の建設が決定しました。第一〇回協議会（八月七日）で、納税組合に還元された昭和二七・二八年度分市民税の五％にあたる約七、五〇〇万円が文化会館建設資金とされ、第一三回協議会（九月九日）において、七候補地のひとつであった日本木管跡に決定。第二回尼崎市議会臨時会（一〇月七日）で、文化会館の建設が可決され、確実なものになりました。文化会館建設趣意書には、「日本一の工業都市大尼崎建設を目指し、あらゆる困難と戦いその目的達成に邁進している我が尼崎市に於て既設の公共的施設の中で最も欠けてをり市民が緊急に要望するものは文化向上に関する施設である。文化人阪本勝氏を我らの市長として迎えてから二年余を経た今日大防潮堤工事の完成を主とする財政上の困難に原因があったにせよ何ら見るべき文化的施設の建設が行はなかったことは誠に遺憾に堪えない」とあります。



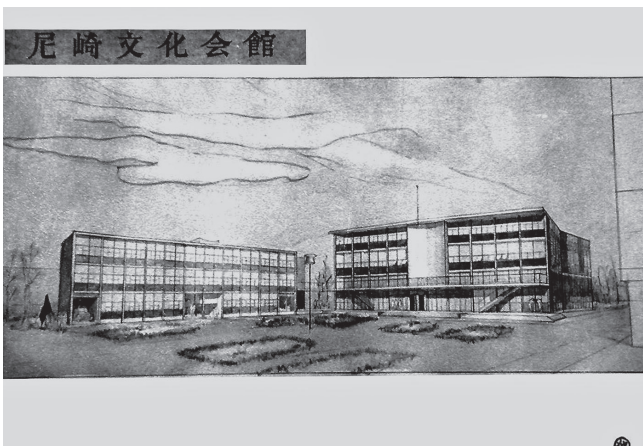
（図2）宇都宮隆夫（NAU会員）案



（図1）NAU京大班案



（図4）NAU大阪支部案



（図3）NAU京工（京都工芸繊維大学）班案

依頼を受けたNAU大阪支部は、第一回競技設計打合せ会（二月一四日）で、「1. 各グループが基本データを交換しながら一案ないし二案提出すること、2. できるかぎりタイプを変えて提出すること、3. 当選したときは当選案を中心に実施設計を全会員が参加して共同設計を行うこと、4. できるだけ使用者側の要求を設計に反映させるために組合の人達に意見を聞いて設計に取りかかること」を申し合わせています。

第一八回協議会（二月九日）において、羽田案、相原案、NAU大阪支部の関係者六案、ぜひ見てもらいたいと提出された二案を加えた合計一〇案で「設計競技」を行ない、審査員は岸田日出刀（東京大学）に依頼することが決定しました。その経緯については資料がなくわかりません。



（写真2）尼崎市立図書館、昭和34年撮影

文化会館設計案は、建設決定直後からさまざまな案が検討されています。第一五回協議会（一〇月一九日）では、設計図作成にあたり「イ. 一般から懸賞公募する方法、ロ. 専門家に依頼する方法、ハ. 建築課において作成する方法」が提示されました。その結果、市側から羽田他所夫（羽田他所夫事務所）、相原武（KINCO建築設計事務所）、NAU大阪支部に対して、文化会館設計図作成への参加依頼がなされました。正式な設計競技の募集規定は見つけることができませんでしたが、「1.（日本木管跡の敷地内に）市庁舎の予定地を空けておくこと、2. 建築予算八、〇〇〇万円で、八〇〇名収容可能であること」が条件だったようです。

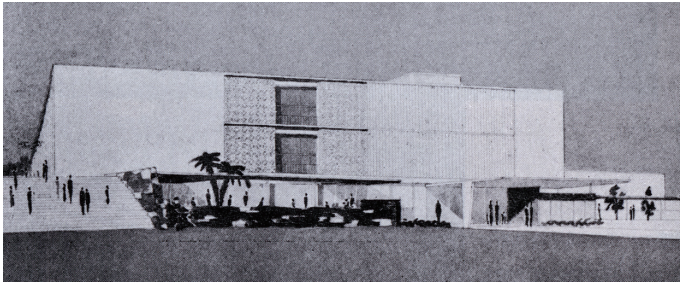
が、岸田は戦後初期の設計競技の審査を数多く手掛けていることから、適任者とされたと考えられます。市民向けには「わが国建築界の最高権威者東大教授、岸田日出刀氏」^③と紹介されています。

設計競技に提出された一〇案には、中庭や前庭が計画されたものが多く（図1～4）、NAU大阪支部は、本計画において「文化会館が、阪神地方の労働者や市民の生活と平和を守り、文化を発展させるつどいの場となることを望んで設計した」としています。

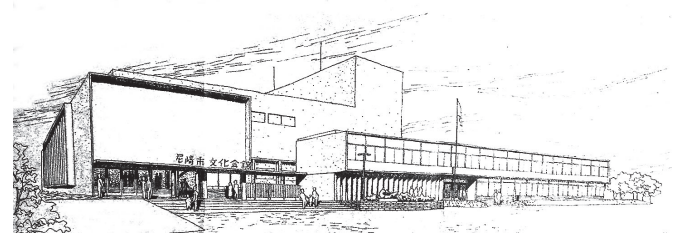
第二〇回協議会（昭和二十九年一月一九日）の「文化会館設計審査の報告書」には、この設計競技を審査するにあたって岸田は「応募案の選定よりも設計者選定を重要視した」と述べており、当選案（図5）を選んだ後も「この案は決して万全なものでないだろうし、市側の希望もあるようだから充分に相談し、検討して、気持ちのよい便利なものを作ってもらいたい」としたとあります。当選案の設計者であるNAU大阪支部の今西茂雄も「あくまで試案であるから、使いようによって変えることを考えている」と答えています。九月一日、新しいプラン（図6）を岸田に見せ、「本案で結構だ」という返事を得た後、NAU大阪支部は実施設計に着手しています。ここでは、実施設計を共同設計と位置付け、全会員が参加して設計がなされています。このような経過を経て、文化会館は尼崎市内の（株）大藤組が施工し、昭和三〇年に竣工しました。

尼崎市立図書館に関する史料とインタビュー調査 尼崎市立図書館について、市建築課の『工事関係書』二綴り（地域研究史料館保管）をもとにたどりま

図書館の設計計画は、第一八回市議会定例会（昭和三十一年一〇月二日）における市立図書館の移転建設



（図5）設計競技当選案（出典『建築と社会』35輯6号、1954.6）



（図6）実施案

います。一九五〇年代後半には、円形建築を推進した建築家・坂本鹿名夫^{かなお}による実施作が校舎を主として多く生み出され、また坂本以外の設計者による例も現れるという、円形建築の流行期でもありました⁴⁾。

尼崎市教育委員会は、円形三階建ての図書館を建設予定であるとしながら、他の変形建築の事例として、東京都立日比谷図書館の正三角形平面、大阪府の八尾市立南山本小学校の八角形校舎などを取りあげており、円形に強い関心を持って当初案が作成されたことがうかがえます。建築住宅課は、この当初案作成完了後の昭和三年一月八日、「これが採用して居る円型構造は本市に於いて初めての試みであるので模型を作成の上検討いたしたい」として模型（二〇〇）を発送しています。予算執行伺書では、模型の必要理由を「検討」のためとしています。模型専門店である芦屋市の山根工務店には、石膏を主体にアクリライト（合成樹脂素材）、セルロイド（同前）などを用いて作成し、樹木や自動車を適宜配置するという完成予想模型的なものとし、ガラスケースに収めることを要求していることから、この「検討」はむしろ関係各方面の了解を得るためのプレゼンテーション、あるいはどこかに設置して展示に供するという意図があったのではないかと推測されます。

昭和三年一月二二日付の伺書では、「尼崎市立図書館新築工事設計委託の件 表記、図書館新築工事の設計は急を要しますが、現在工事中の現場もあり、学校関係、交通局等の設計を急がれて現在人員では到底間に合いかねます。特に当工事に採用する円形構造は本市に於いて初めての試みでもあり此の際文化会館の設計者建築家集団大阪支部に下記の条件により予算

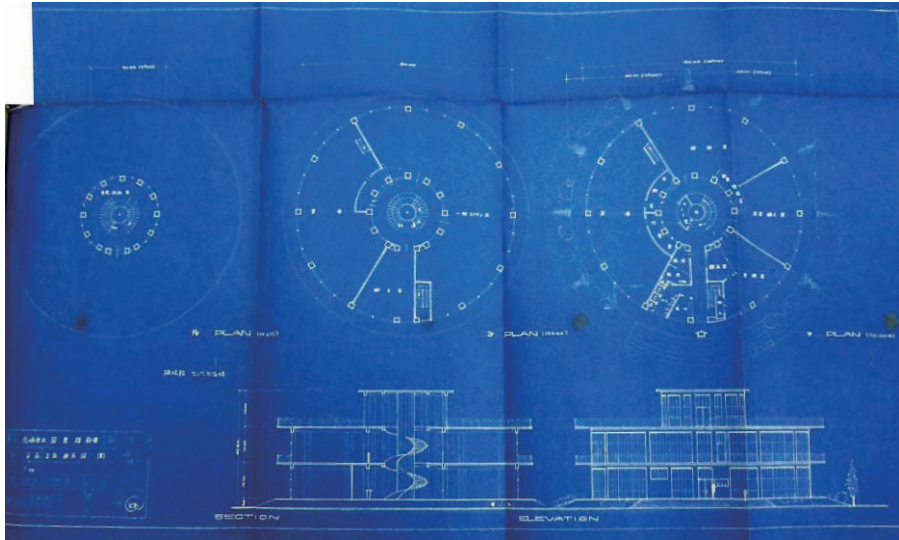
範囲（四五万円）にて設計を委託してよろしいか」として提出されています。この伺いは認められたいしく、NAU大阪支部は同市からの委託を受けて、同年二月一二日開催の「設計委員会」に持ち寄り全会員で検討し、基本設計をまとめることになったようです。

昭和三年一月七日付の建築住宅課発行の伺書は、NAU大阪支部から九点の基本設計が提出されたので、その審査指導を当時大阪市立大学教授の瀧澤眞弓に委託したいというものでした。二月一八日付の伺書では、基本設計一四案から瀧澤の審査によって四案を選び「これらを折衷し且つ図書館側の希望も容れ再度検討」の結果、基本設計が完成したので本設計に着手したいとしています。結果的に、最終基本設計は円形建築ではありませんでした（図9）。どの段階で、いかなる理由で円形建築案が消滅したかについては手掛かりがなく詳細は不明ですが、当時の図書館関係者によると「図書は本来四角なものだから、円形では納まりが悪かるう」という意見もあったようです。この基本設計にもとづいて、実施設計が委託料四五万円でNAU大阪支部に引き継がれました。その結果、図書館は尼崎市内の（株）柄谷工務店が施工し、昭和三四年に竣工しました。

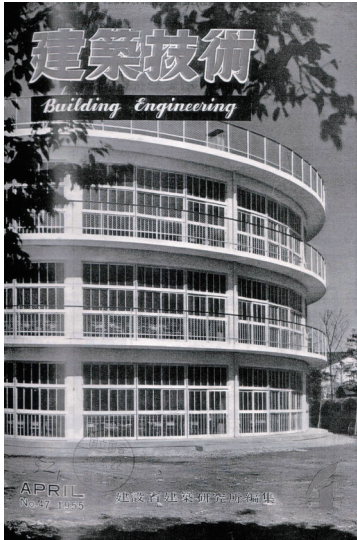
以上のように、円形建築は幻に終わりましたが、その後昭和三五年には、円形に近い一六角形校舎の尼崎市立浦風小学校（写真3）が建設されています。

まとめ 戦後、建築運動団体の一つであったNAU大阪支部によって創出された二つの公共建築の建設背景には、以下の共通点があります。

一、設計競技のあり方という点で、厳正さを欠く行為ではありますが、審査員により当選案が選出されて



（図7）尼崎市立図書館円形案



（図8）『建築技術』第75号（1955.4）

いるにも関わらず、その案に対して審査員がさまざまに提案し、修正を加えています。

二、NAU大阪支部は、意匠・設計・構造計算・設備関係を全会員で打合せ協議を行なう集団設計という新しい方針を打ち出しました。かつてNAUの設計活動は、労働組合との連携が背景にありましたが、ここでは工業都市の市民文化を背景にしています。それはまた、住宅地としての性格が強い阪神間において、工業都市としての独自の風土をもつ尼崎市特有の現象のように思われます。設計から実施に至るまでの過程に、戦後復興期の民主的気運を内包している点で、興味深い事例であるといえます。

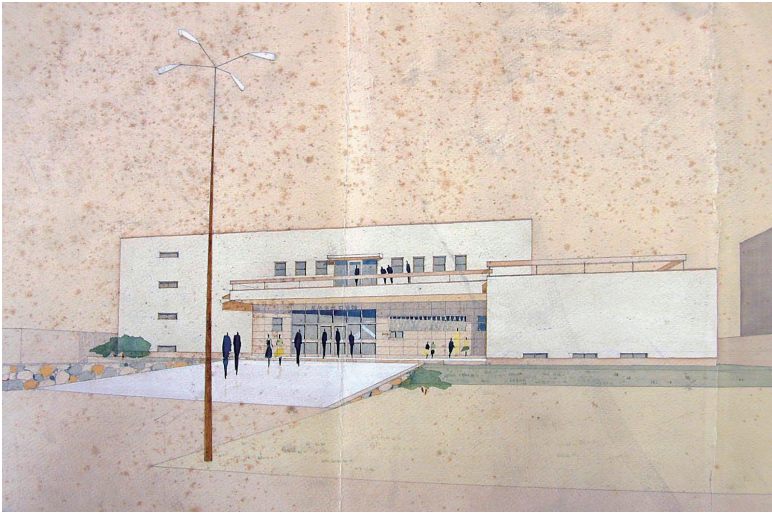
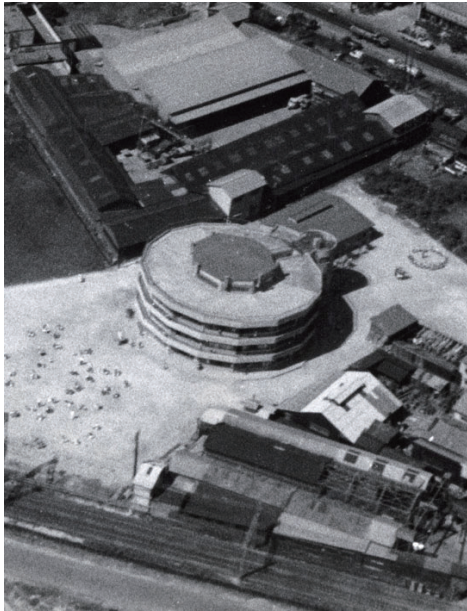
〔注〕

（一）本項は、『地域史研究』第三五巻第一号（二〇〇五・九）掲載の船曳悦子「尼崎市文化会館の設計過程にみる戦後初期の尼崎市と新日本建築家集団大阪支部の活動」及び第三六巻第二号（二〇〇七・三）掲載の同「尼崎市立図書館の設計案作成過程にみる戦後初期の尼崎市と新日本建築家集団大阪支部の活動」をもとに執筆した。

（二）今西茂雄の作品 尼崎文化会館設計について（『建築と社会』第三五巻第六号、一九五四・六）

（三）『市報あまがさき』第九八号、一九五四・九・一五（4）梅宮弘光「円形校舎にみるモダニズムの戦後坂本鹿名夫の「純粋機能主義」と円へのこだわり」（石田潤一郎監修『関西のモダニズム建築―一九二〇年代く六〇年代、空間にあらわれた合理・抽象・改革』淡文社、二〇一四）

〔執筆者〕 船曳 悦子



（図9）完成予想図（パース）

（写真3）尼崎市立浦風小学校と、その周辺、昭和35年撮影

第二節〈実践編〉

2体験・回想・聞き取り

同郷者集団の調査



『月刊榕樹』
兵庫県沖縄協会（沖縄県人会兵庫県本部）発行



『江石会新聞』江石会発行

して、同郷者集団の調べ方についてみていきます。まずは、尼崎市における同郷者集団に関する概要を説明しておきましょう。

尼崎市の同郷者集団 尼崎市はかつて「出郷者の町」であることを大切にしていました。同郷者集団のなかには戦前から活動してきたものもありますが、とくに昭和四五年（一九七〇）には当時の篠田隆義市長の音頭によって「尼崎各県人会連絡会」（後に連合会）が結成され、二一の県人会が加盟しました。連絡会の結成にあわせて阪神大物駅の北に「産業郷土会館」（現尼崎市社協会館）も建設されました。この会館はもともと「県人会館」として計画されたものであり、実際に同郷者集団の会合で使われてきました。「産業郷土会館まつり」（現在の「ふるさと交流会館まつり」）も、尼崎各県人会連絡会の集会です（写真1）。この会館の正面には尼崎各県人会連絡会を記念する石碑があり、隣接する大物公園には、各都道府県の木を配置して日本列島をかたどった「ふるさとの森」もあります。多くの県人会は、尼崎市行政と緊密な関係にあったのです。

県人会だけでなく、一部の同郷団体も産業郷土会館を利用してきました。同郷団体を公的な場で見かける機会はあまり多くないかもしれませんが、しかし市内の小中学校や武庫川の河川敷、あるいは阪神尼崎駅前などにおいて、運動会やその他大小のイベントを開催している同郷団体はめずらしくありません。その活動を市内で目にしたり、そうしたイベントを取りあげた新聞記事を見かけることもあります。さらに、尼崎市や周辺の都市では、飲食店などの店名に地名が含まれるものをしばしば見かけます。「さつま」や「土佐」、

はじめに 都市の経済活動が活発化するとき、そこで働く人々のかんりの部分は外部からやって来る出郷者によって占められます。出郷者とはその名のとおり、生まれ育った故郷を離れた人々を意味します。工業都市として全国的に知られた尼崎市は「出郷者の町」でもあります。

出郷者の多くは、無秩序に都市にやって来るものではありません。たとえば、先に出郷して別の土地に定住した同郷者を「つて」として移動した人が、また別の同郷者の「つて」になるという「連鎖移住」が繰り返されることがあります。あるいは集団就職のように公共職業安定所などの公的機関を利用した移動であっても、特定地域間での移動の流れが継続することはめずらしくありませんでした。このいずれのケースでも、相当数の同郷者が同じ都市に集まることになります。

尼崎市では、鹿児島県や愛媛県など、九州・四国・中国地方からの出郷者やその家族が数多く住んでいます。みなさんの家族や友人、知人のなかには出郷者が含まれるでしょうし、みなさん自身が出郷者だということもめずらしくないでしょう。

同郷者がある特定の場所に集まって住んでいるときには、「同郷者集団」が設立されることもあります。同郷者集団とは、移住先において同郷者が集まって創り出す社会集団の総称であり、実際にはいろいろな集団が含まれます。よく知られた「県人会」は、出身県という比較的広い範囲を「同郷」の単位とみなして設立されます。出身市町村や出身集落・学区・島などの狭い地域を「同郷」の単位とするものは、「同郷団体」とか「郷友会」と呼ばれてきました。

大規模な人口移動現象がみられた高度経済成長期

「加計呂麻」といった店は、その地名が示す故郷と結びつく同郷者を得意客にしている可能性が高く、県人会や同郷団体の情報が得られるかもしれません。

このように、尼崎市には産業郷土会館のような公的な施設がありましたし、街中の飲食店や新聞記事などを注意深く見ていけば、同郷者集団の名前を見かけたり、少なくとも出郷者の存在は理解できるはずです。また、すでに関連する研究も進められています⁽¹⁾。

では、実際に同郷者集団を調べるにはどうしたら良いのでしょうか。

同郷者集団に関する文献・資料 尼崎市の図書館や地域研究史料館の蔵書検索で「県人会」というキーワードで検索してみると、いくつかの文献が確認できます。もっとも有名なのは沖縄県人会兵庫県本部の三五年史である『ここに榕樹あり』⁽²⁾であり、同書は研究者の間でもしばしば引用されるほど充実した内容となっています。沖縄県人会が毎月一号ずつ発行している『月刊榕樹』の一部も地域研究史料館に所蔵されており、比較的手に取りやすいものです。沖縄県人会では事務局でさまざまな資料を一般公開しており、第二次大戦前の『大阪球陽新報』、戦後の『球陽新報』といった貴重な資料も揃っています。なお、地域研究史料館では、尼崎高知県人会の二〇年史である『夾竹桃のように』⁽³⁾なども確認できます。

その他の県人会に関しては、かつて「産業郷土会館まつり」にあわせて発行されていたパンフレットに、尼崎各県人会連絡会（連合会）に加盟する各会の情報記載されていました。このパンフレットは一九九〇年代半ばまで作成されていました。産業郷土会館それ自体については、『三〇周年記念誌』が発行されてい



(写真 1) ふるさと交流会館まつり



(写真 2) 鹿児島県江石会大運動会
毎年1回、市内の学校グラウンドを借りて開催されている。

（一九七〇年代前半・昭和四〇年代頃まで）には多数の同郷者集団が作られました。二世紀の現在では新規に設立されることは少なく、むしろ多くの会が活動をやめている状況にあります。ですが、いまでも活発な活動を続けている会もあります。

同郷者集団は、出郷者が同郷の仲間たちとともに故郷について語りながら親睦活動を行なっているという側面だけを考えても、興味深い対象となります。もっとも、同郷者集団についてよく調べてみると、それらが、現住地である尼崎市の政治や社会と密接に関連してきたこともわかります。同郷者集団は故郷志向であるばかりではないのです。この項では、尼崎市を構成する社会集団や個々人について調査するための一例と

ます⁽⁴⁾。

同郷団体の例では、鹿児島県江石会（以下「江石会」と略称）について触れてみましょう。鹿児島県の離島である甕島（薩摩川内市）に江石という集落があります。この江石を故郷とする人々が尼崎市を中心とした阪神間に多数住んでいます。江石会は江石出身者の同郷団体です。そして毎年一回、尼崎市内の学校を借りて総会・運動会を行なっており（写真2、『江石会新聞』という機関誌を年一回発行しています。その努力ははかりしれません。

同郷者集団について知るうえで、『江石会新聞』のような資料は非常に貴重なものです。しかし沖縄県人会を除けば、同郷者集団の多くでは内部資料は一般公

開されていません。こうした資料を確認・入手できるかどうかも含めて、関係する人々に連絡をし、話を聞くということがどうしても必要になってきます。

同郷者集団の関係を探す　もし同郷者集団について知りたいのであれば、何らかの情報源を利用して関係者の連絡先を知る必要があります。私が尼崎市の県人会について調べたときは、産業郷土会館まつりのパンフレットを手がかりに、各会の会長宛にアンケート調査票を送付することから始めました。その際には尼崎高知系県人会、沖縄県人会兵庫県本部の二つの県人会会長から返事があり、その後長らくお世話になりました。もっとも、同郷者集団の多くは連絡先を公開していないので、連絡先を知るのが困難なこともあります。江石会については、実は私自身の力で連絡先を知った訳ではありませんでした。恩師のひとりが甕島の江石集落の調査を行っており、当時の上甕村役場で情報を得た江石会の調査も始めていました。私は恩師から教えられて江石会に連絡することができたのです。

ここで重要なのは、出郷者たちの故郷にある県庁や市役所、町村役場が、関連する同郷者集団について把握していることが多い、という点です。同郷者集団の関係者を探すために故郷の地方公共団体にたずねるという方法は、かなり有効です。最近では県庁でも村役場でもホームページを作っていますから、地方公共団体に連絡することそれ自体はむずかしくありません。

同郷者集団の多くは会長や事務局長といった役員を置いており、まずはそうした役員の方々に連絡し、対応してもらうこととなります。話を聞かせてもらえるのであれば、それぞれの同郷者集団の歴史や活動、会員数といった基礎的な情報を教えてもらいましょう。

また、先にも記したように、刊行物やその他の資料があるかどうか、それを見せてもらえるかどうかも聞いてみましょう。

同郷者集団の見方―方法的個人主義の例　ある同郷者集団について基礎的な情報が得られたことで、その集団についてある程度理解できたとします。内部資料まで見せてもらえるのであれば、その集団についてかなり詳細に知ることができます。そもそも内部資料を見せてもらえるということは、その集団において調査者がある程度は認められたということです。よって多くの情報を教えてもらえる可能性もあります。ですが、基礎的な情報以上のことを知りたいと思ったとき、そもそも何に焦点をあてるかが問題になってきます。

私自身は、都市社会地理学徒として同郷者集団の研究を行ってきました。つまり、単に同郷者集団が活動しているというだけでなく、出郷者個々人が都市空間においてどのように生活し、人間関係を築くなかで、同郷者集団がいかに組織され活動しているのが課題となるのです。ポイントは、出郷者個々人がどこに住み、どこで働き、どこで他の同郷者と会うことができるかです。このようなかたちで個々人の動きにまで関心を払う方法を、私は「方法的個人主義」と呼んでいます。これは、個々人がそれぞれ勝手に生きているということでは決してなく、ひとりひとりの考えや動きを重視しながら集団を見ていくという研究方法を意味しています。

先に触れたように、連鎖移住が生じると、特定の移住先に同郷者が集中（集住）することはめずらしくなく、それが同郷者集団の設立のひとつの条件となります。特に同郷団体については、出郷前からお互いに知

さったことを思い出します。県人会の設立や活動には、さまざまなドラマがあるのです。

沖縄県人会兵庫県本部については、前掲の『ここに榕樹あり』という優れた文献があります。しかし同書では、尼崎市や伊丹市、宝塚市などにある集住地区（及び支部）それぞれの実態にはあまり触れられていません。沖縄出身者の集住地区を大きく分類すると、工場労働者として働く人々が作り出した集住地区（多くは尼崎市南部）と、そうではない地区（多くは河川に近い場所）とがあります。いまでは想像できない人もいるかもしれませんが、沖縄出身者はかつて差別を受けることがあり、その差別に対処しつつ生活していく場所を見つけ出す必要がありました。

そうした差別を避けるために、新天地を切り開いていく人々もいました。私は沖縄出身者の集住地区それぞれの性格や、その内部での人間関係にまで留意しつつ、県人会支部の役員や、役員から紹介された集住地区の長老などに話を聞いて回りました。

これらの内容は、注（一）の拙著『出郷者たちの都市空間』で詳述しました。また江石会の調査手法に関してもひとつの論考にまとめました^{〔5〕}。

おわりに　尼崎市は「出郷者の町」であり、ゆえに同郷者集団も数多く見つかります。ここでは鹿児島県出身者の同郷団体の例として江石会を紹介しましたが、実は甕島には一〇以上の集落があり、それぞれについて同郷団体が設立されています。さらにその連合組織として関西甕島連合会もあります。奄美出身者の会も多数あります。これらの同郷者集団は、いずれも同郷者との大切な関係のなかで設立され、活動しています。ただし、それぞれの集団が簡単に設立されたと

り合いであった可能性が高く、集住地区があれば同郷者集団が「自然発生的」に設立されると見なす研究者もいます。連鎖移住が起こり、集住地区が形成され、そこで同郷者集団が設立されるという説明は理解しやすいものでしょう。しかし同郷者がまわりにいるからといって、ただちに集団が設立されるとは限りません。少し考えてみると、同郷者間の関係が密接であるならば、わざわざ会を組織する必要は必ずしもなかったはずです。会組織が作られたことには、何かきっかけがあったはずです。同じように県人会の設立も単純なものではありません。県人会では「県」という広い範囲が同郷の単位となるので、もともと知り合いでなかった人々が集まって組織が作られることになりました。たとえば同県人が集まっている職場があれば、比較的容易に県人会が組織されます（職域県人会）。しかしそうでない場合には、会をまとめるための目的や強力なリーダーの存在が必要となる場合が多いですし、会員集めも大変な作業となります。

同郷者集団の事例　たとえば、江石会が設立されたのは高度経済成長期の昭和四二年のことでした。当時は多数の工場労働者が必要とされていたので、多くの江石出身者も連鎖移住によって尼崎市にやって来ました。ところが、まさに非常に多忙な時期であり、休日も返上して働くことがめずらしくありませんでした。つまり近くに同郷者がいたにも関わらず、忙しすぎて互いに会うことができなかったのです。

ちょうどその折に、甕島出身者を父親に持つN氏という尼崎市議会議員がいて、昭和四二年の選挙に向けて組織固めをしていました。江石会は、ばらばらに生活していた江石出身者たちに政治家が力添えをするこ

考えるのは、実は誤りなのです。

同郷者集団について知りたいと思ったら、まずは基礎的な情報を集め、次いで出郷者個々人や集住地区それぞれの詳細について話を聞かせてもらい、内部資料を確認させてもらうこととなります。その際には、たとえば、方法的個人主義によって出郷者ひとりひとりの動きを重視してみる、という方法があります。そうすれば、尼崎市という都市に生きてきた出郷者個々人の生活のなかで、いかに同郷者集団が作られ、活動してきたのかがくわしく理解できるでしょう。

〔注〕

- （一）松本通晴・丸木恵祐編『都市移住の社会学』（世界思想社、一九九四）、山口覚『出郷者たちの都市空間―パーソナル・ネットワークと同郷者集団―』（ミネルヴァ書房、二〇〇八）、同「出郷者の町―同郷者集団と地域社会―」（『図説尼崎の歴史』現代編第二節5コラム、二〇〇七）
- （二）『ここに榕樹あり　沖縄県人会兵庫県本部三五年史』（沖縄県人会兵庫県本部、一九八二）
- （三）『夾竹桃のように　尼崎高知県人会二十年史』（尼崎高知県人会、一九八三）、『尼崎高知系県人会50周年記念誌』（尼崎高知系県人会、二〇二二）
- （四）『産業郷土会館三〇周年記念誌』（尼崎市立産業郷土会館、二〇〇〇）
- （五）山口覚「工都に生きる出郷者から学ぶ―故郷をもに想いながら多様化する人々―」（梶田真仁・平尊明・加藤政洋編『地域調査』ことはじめ　あるく・みる・かく』ナカニシヤ出版、二〇〇七）

〔執筆者〕山口 覚

やまぐち さとし

第Ⅲ部第六章「尼崎の現代」第二節（実践編）

第二節 〈実践編〉

3 調査・研究から活用へ

アクション・ペインター 白髪一雄と尼崎



アトリエでの制作風景
1963年



白髪一雄記念室（展示室）

はじめにー白髪一雄記念室の開設ー 尼崎市には、文化財を伝えるために、どのような施設があるのでしようか。市の施設としては、田能遺跡の遺物を収蔵・展示する田能資料館と、かつて尼崎城があった南城内に設置された文化財収蔵庫があり、これらが市の博物館的な役割を果たしています。

一方、現代の文化財、例えば絵画などの美術作品は、尼崎市総合文化センターに集められています。市制五〇周年を記念して、当時全国有数の文化センターとして計画され、庄下川に架かる玉江橋近くにあった文化会館に隣接するかたちで昭和五〇年（一九七五）に文化棟を開設、昭和五四年三月末をもって廃止された文化会館の跡地にホール棟（現あましんアルカイックホール）が建設され、昭和五七年に開館しました。

文化棟に設置された美術ホールでは、開設当初からさまざまな展覧会が開催され、市の美術館的な役割を担ってきましたが、展覧会を通じて多くの作品の鑑賞はできるものの、市所蔵の美術作品を常時観ることができる場所はありませんでした。

そこで、尼崎出身の抽象画家、白髪一雄（一九二四―二〇〇八）が没した五年後の平成二五年（二〇一三）、市が多数所蔵する白髪作品を広く紹介することを目的として、尼崎市総合文化センター内に白髪一雄記念室（以下、記念室と略す）が開設されました。白髪は、天井から吊るしたロープにつかまり、足で絵具の上を滑走して描くという独創的な描法で知られています。身体性を取り入れたアクション・ペインティングという新たな絵画表現を切り開いたことによって、世界的な評価を受けた画家です。

白髪は生前、折にふれて市内各所に自作を寄贈して

的な流れの最先端に行きつくことが、自分のこれからやる仕事の目標だろう」という考えに至ります。⁽²⁾

やがて白髪は、構図や色彩観念といった従来の絵画から離れて新たな表現を模索するようになり、絵筆からペインティングナイフ、手指、そしてついに素足で描きはじめます。白髪は自身が好んだ油絵具の流動感を最大限に活かすため、一度に大量の絵具を使ってダイナミックな絵画を描くことを思いつきます。そのためには、油絵具が垂れないようにキャンバスを床に置き、みずから画面のなかに入り込んで描く必要がありました。そして、さらに天井から吊るしたロープに掴まりながら縦横無尽に絵具を足で押し広げて描くことにより、力強さとスピード感特徴とする独創的なアクション・ペインティングを生み出したのです。

こうして描かれた白髪のアクション・ペインティングの代表作「水滸伝シリーズ」全一〇八点は、血を思わせる赤を主体とし、身体から湧き出るエネルギーをキャンバスにぶつけた血気みなぎる大作です。これらの作品は、当時、戦後の新しい抽象芸術の動向を「アンフォルメル」⁽³⁾として紹介したフランスの美術批評家ミシェル・タピエによって高く評価されました。白髪は来日したタピエと契約を交わし、描いた作品を数年間ヨーロッパへ送ることになりました。そこで、次々と送り出す個々の作品を後に識別できるようにと、白髪は作品に中国古典の愛読書『水滸伝』に登場する豪傑の名を付けたのです。

このシリーズのほとんどが一九五〇～六〇年代に描かれ、その多くが海外に渡りました。その後、日本国内に開館した数多くの美術館に、戦後日本美術を紹介するうえで重要な作品として、海外から買い戻された

いました。それらが尼崎市総合文化センターに集約され、重要な収蔵品となったことが、この記念室ができた背景として大きく影響しています。また、この記念室の特徴は、作品だけでなく白髪が遺した書籍や写真、手紙など、さまざまな関係資料を一括して保管する、白髪一雄のアーカイブ⁽⁴⁾でもあるということです。

本項では、記念室で保管している白髪自身が遺した蔵書や記録写真、市に残る資料などを調査しながら、作品を観るだけではわからない白髪と尼崎との深い関わりを考察します。

アクション・ペインター白髪一雄

白髪は大正一三年（一九二四）、尼崎市西本町の呉服店の長男として生まれ、幼い頃から絵を得意とし、読書好きな少年でした。父親が趣味で油絵を描いていたことから油彩に興味を持ち、旧制尼崎中学（現県立尼崎高校）時代には新設された絵画部に入り画家を志します。

白髪は東京の美術学校への進学を希望しますが、家業を継がせたい家族や親戚の反対と、第二次世界大戦の影響による食糧不足などへの不安から断念し、自宅通学が可能な京都市立絵画専門学校の日本画科で学びました。

日本画科に進学したのは、当時まだ同校に洋画科がなかったためで、終戦後に卒業した白髪はすぐに以前から好んでいた洋画に転向し、当時大阪に新設された市立美術研究所で洋画を基礎から学びました。

その後、新制作派協会の会員で芦屋市在住の画家、伊藤継郎のアトリエにも通い研鑽を積み、新制作派協会の展覧会にも出品するようになります。

白髪はこの時期、愛読していたドイツ文学や自身が見た夢に着想を得た抽象的な絵を描いていましたが、作風が三年ほどのうちに急速に変化し、昭和二九年頃

作品がコレクションされました。そのため現在は、国内の多くの美術館で白髪作品を観ることができま

す。なお、この「水滸伝シリーズ」のうち、当時海外に送られず白髪自身によって寄贈された貴重な二点が、尼崎市に収蔵されています。

作品寄贈の背景

《天傷星行者》（図3）は、昭和

三七年、現在の尼崎市庁舎が東七松町に新設された際に市へ寄贈され、市長室に飾られていました。建築家村野藤吾が設計した新庁舎の真新しい白壁に、威風堂々掲げられた大画面が市の記録映像のなかに残っています。⁽⁴⁾ また、白髪は市民の文化活動の中心であった市の文化会館にも同シリーズの《天富星撲天雕》を贈っています（図4）。

白髪はなぜこれらの大作を市に寄贈したのでしょうか。残念ながら、作品台帳にはこの大作二点の寄贈の経緯を示す記述は残っていません。このような場合には、当時の状況を知るために関連資料などを調べることに重要になります。たとえば、昭和四〇年当時の『市報あまがさき』をみると、前年（昭和三九年）一〇月と同年一月の二回にわたって行なわれた市内の芸術家が集まる懇談会で、白髪が次のように発言したという興味深い記事が掲載されていました。

「尼崎在住の芸術家達が尼崎から逃げ出していく風潮にある。わたし自身尼崎の美術家協会に入っていないがら芦屋に逃げている形になっている。これからは美術家協会員の絵をどんどん展示して、市民のみなさんにみてもらうようにしてほしい」⁽⁵⁾

そして、昭和四〇年の新聞記事にも「尼崎市民に「撲天彫」白髪画伯が大作贈る」などの見出しで、白髪が



（図1、上）《夜の風物》1950年 尼崎市所蔵
（図2、左）《文B》1954年 尼崎市所蔵

には完全な抽象絵画へと向かいます（図1・2）。当時白髪は外山卯三郎の著書『二十世紀絵画大観』のなか

に述べられた二〇世紀絵画表現の大きな二つの流れ、

「知的なものとしての絵画」と「情的なものとしての

絵画」という分類に着目し、自身の資質とその進むべき

方向は後者であると考えました。そして、「この情



(図3) 《天傷星行者》1960年 尼崎市所蔵



(図4) 《天雷星撲天雕》1963年 尼崎市所蔵

文化会館に作品を寄贈したことが報道されています。⁶⁾

白髪は当時、芦屋在住の画家、吉原治良(じろう)をリーダーとする前衛美術グループ「具体美術協会」(以下、「具体」と略す)の主要メンバーとして国際的な展覧会で作品を発表するほか、パリの画廊で個展が開かれるなど、第一線の抽象画家として知られ始めた頃でした。「人のまねをするな」「これまでになかったものを創れ」という吉原の厳しい教えのもとに、「具体」の若いメンバーたちが活動を始めた五〇年代半ば、白髪は身体性を強く打ち出した作品を次々に発表します。

円錐形に立てた赤い丸太のなかに入り、斧で切り付けた《どうぞお入りください》や、一トンもの泥のなかにみずから飛び込んで描いた《泥にいどむ》(写真1)など、白髪の表現は注目を集めたものの、当時の新聞や雑誌などによる紹介のされ方は、作品そのものの評価よりも「体当たり芸術」などといった話題性が先行していました。⁷⁾

当時のこれら複数の資料から考え合わせると、白髪



(写真1) 《泥にいどむ》1955年

が市役所や文化会館に作品を寄贈した背景には、尼崎市の文化振興という目的とともに、もうひとつ別の意図があったのではないかと推測されます。白髪は、「足で描く抽象画」という言説から生まれる偏った作品のイメージではなく、行為そのもののエネルギーを画面に定着させるという自身の作品の本質を、直接見て肌で感じてもらう機会がもっと必要だと考えていたのではないのでしょうか。その結果が、一般市民が多く訪れる公共施設への寄贈であったと考えられます。

白髪は「絵画というものは何が描いてあるのかわからないと観る人達は戸迷うらしく何時もそんな風な質問を受ける。しかし美とは見たままだけをわかるものではなく、心に感じるもの。日本の庭園や茶器や刀剣の美は抽象的であるだけに見慣れなければわからない」と述べています。⁸⁾ 旧家に生まれた白髪は子どもの頃から、家宝として伝えられた名刀の打ち鍛えられた妖しい美しさに魅かれ、《長義》や《貞宗》など、刀工の名を付けたと思われる作品も残しています。白髪の作品に備わる深みと強度は、このような時代を超えた美意識にも関係しています。⁹⁾

白髪一雄と尼崎 白髪の実家である木市呉服店(きいち)は明治半ばに創業した尼崎の老舗呉服店で、白髪の誕生当時、旧尼崎城下の東本町から城内・西本町にかけて栄えた本町通商店街のなかにありました。その近くにある貴布禰神社(きふね)で毎年夏に行なわれる祭りは、市内の各町から多数のだんじりが繰り出し、宮入りするときにぶつかり合って勝負するというもので、通称「けんか祭り」として知られています。多数の負傷者が出るほどの荒々しさであったその祭りを、白髪は「激しさのなかに華やかさ」があったと語り、幼少期に見て脳裏

に焼きついたこの祭りの記憶が、自身のアクション・ペインティングに表れていると語っています。

白髪のアクション・ペインティングについて、具体のリーダー吉原は「君の絵は非常にむごたらしい感じがしてなにか生々しい。それがええとこやけども、それも尼崎のせいと違うか」と評したといえます。白髪が育った当時の尼崎は、江戸時代の城下町の風情を残しつつ、漁師町として賑わう町から工業都市へと急速に発展を遂げました。長年にわたり白髪を研究してきた平井章一氏は、「美術や文学を愛し尊ぶ一方で、命を賭けた力と力のぶつかり合いに熱狂する尼崎の文化」に着目し、「そのまったく相反する側面を併せ持つ「内なる両極性」が白髪の人間性や芸術性に幅広さや奥深さをもたらしている」と評し、白髪における尼崎の文化の重要性を指摘しています。¹⁰⁾

その「内なる両極性」は、白髪の人生において大きな転機となった密教との関わり方にも見出すことができます。大阪万博が華々しく開催され科学や未来が語られる一九七〇年代、白髪は現代美術の最前線に身を置きながら、比叡山で修行するという相反性をあわせ持ち、独自の道を歩みました。この「内なる両極性」を内包しながら、若い頃に思い定めた「情的なものとしての絵画」の最先端に行きつくことを、白髪は生涯にわたって目指したといえるでしょう。

白髪のアクション・ペインティングには、何かを打破ろうとする力強さと同時に不思議な安定感が感じられます。その足運びには、自身が習った能の動きが無意識に影響しているかもしれないとも語っています。白髪の作品のなかには、尼崎のけんか祭りの動的な荒々しさと同時に、能の静的な美しさや仏教的な深い



（図5）《祝いの舞》一九八一年
この原画から織物におこした緞帳が、現在も使用されている。



（図6）《尼崎西本町三丁目付近》
一九四七年 尼崎市所蔵

人々を魅了しています。

白髪一雄記念室の役割

前述したとおり、白髪は若い頃から自身の芸術性が生まれ育った尼崎に深い関わりがあることを意識し、郷土の文化振興に力を注ぎました。市内の学校などにも自身の作品を積極的に寄贈したほか、総合計画審議会委員、教育委員を務め、文化について提言しています。⁽¹¹⁾ 平成四年の六島誠之助市長との対談では、「今のところ総合文化センターで十分役目を果たしていると思いますが、将来ともぼくはあの場所がいいので、あれがそのまま美術館になってほしいと思っているのですが」と発言しています。⁽¹²⁾

当時はすでに近隣市に美術館が建ち、尼崎市政においても美術館構想が生まれ、それにもづく収蔵品収集の予先として白髪作品ががありました。⁽¹³⁾ 尼崎市はこの考え方のもと、平成三年度から三か年をかけて白髪の初期水彩四八点、版画九点、油彩六点を購入しています。その後は財政難などによる方針転換があったのか美術品収集は行なわれず、一時期に終わりました。しかし、この作品購入は、現在の記念室の収蔵品

として活きるようになりました。尼崎市所蔵作品に多く含まれる白髪の初期の水彩画や油彩画は、地元尼崎でしかまとめて観ることができない貴重なものとなったからです（図6）。

また、白髪は郷土尼崎での個展を希望し、これまでに尼崎市総合文化センターで二度の「白髪一雄展」が開催されました。一度目は平成元年、二度目は白髪が没した翌年の平成二年に回顧展として実現し、全国四か所を巡回しました。⁽¹⁴⁾

白髪は尼崎と自身の芸術との関係について、次のように語っています。「とくに、一九五四年頃から始めた「足で描くアクション・ペインティング」にそれらの事が総て込められていて、潜在する内なるものがある時は画面に凝結した形で現れる。またある時は噴出し、たたきつけるかのように炸裂して、私そのものの存在を積極的に表現しているのではないかと思います。これからも私は昔と今の尼崎を背景に、制作を続けていきたいと考えています」⁽¹⁵⁾

近年、日本国内はもとより海外でも大規模な展覧会で紹介される機会が増え、白髪作品に対する国際的な評価は不動のものとなりました。その根底には尼崎の文化が深く関わっているため、記念室が郷土尼崎に開設されたことは、白髪を知るうえでまさに必然であったといえるでしょう。また同時に、記念室の役割は、戦前から戦後を生きた白髪一雄というひとりの画家を通じて、彼が愛してやまなかった尼崎の文化を世界に向けて紹介していくことでもあるのです。

〔注〕

（1）アーカイブ（英語では複数形“archives”として表記される）とは「記録や資料などをひとまとめにして

の出典は不明だが「文化室美術品01―21―11」と記されている。

（14）「肉体とマチエールの出会い 白髪一雄展」平成元年、尼崎市総合文化センター。「白髪一雄展 格闘から生まれた絵画」平成二〇一二年、安曇野市豊科近代美術館・尼崎市総合文化センター・横須賀美術館・碧南市藤井達吉現代美術館を巡回。

（15）「尼崎、私の今昔」（『ニューひょうご』第一九巻第九号―通巻二二八号）、兵庫県、一九八六・九）より抜粋

〔参考文献〕

芦屋市立美術館博物館編『具体資料集 ドキュメント具体 1954-72』（芦屋市文化振興財団、一九九三）
芦屋市立美術館博物館編『具体展Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（芦屋市文化振興財団、一九九四）
『アクションペインター白髪一雄展』（兵庫県立近代美術館、二〇〇一）
『白髪一雄展 格闘から生まれた絵画』（白髪一雄実行委員会、二〇〇九）

〔執筆者〕妹尾綾

白髪一雄は、昭和三五年（一九五〇）頃より、芦屋在住の洋画家、伊藤継郎のアトリエに通っていました。伊藤は、天彩画塾や赤松洋画塾、信濃橋洋画研究所で洋画を学び、二科展や全関西洋画展覧会で発表、後に小磯良平や猪熊源一郎らに誘われ新制作派協会（昭和二六年、新制作協会と改称）に出品し、会員として



保存すること」や「そのようにまとめられた資料群のこと」、さらには「その保存場所や保存機関のこと」を表す。

多くの場合、公共性が高い資料（古文書・公文書・文化遺産の映像など）に使われる。

（2）白髪は外山卯三郎著『二十世紀絵画大観』（金星堂、一九三〇）と、同じく外山の著書『純粹絵画論』（第三書院、一九三二）を、幼馴染みで後に具体美術協会とともに活躍する金山明から教えられた。

（3）フランス語で「非定形なるもの」の意味。一九四〇年代半ばから五〇年代、フランスを中心としたヨーロッパ各地に現れた、激しい抽象絵画を中心とした美術の動向。表現過程そのものが重視され、物質性と描く行為が前面に押し出されるのが特徴。タピエは当時パリに住んでいたアンフォルメル（*Art Informel*）の画家、堂本尚郎（*ひさお*）を通じて具体美術協会と出会い、彼らを日本におけるアンフォルメルとして海外に紹介した。

（4）「昭和三〇・四〇年代の尼崎」（二〇〇六）、地域研究所史料館所蔵動画を同館が複製・編集したもの

（5）『市報あまがさき』第三四六号（一九六五・二・五）掲載記事「わたしたちと文化」

（6）昭和四〇年二月二十五日付で読売新聞ほか複数の新聞が報じている。

（7）「脚光浴びる“体当たり芸術”」「ニッポンの超モダ

たクロッキー帳を見ると、人物描写を熱心に学んでいた姿勢がわかります。ここには、後に具体美術協会で活動をともした村上三郎も通っており、アトリエ内での記念写真にその姿を見ることができます。

昭和二十七年、白髪は新作で前衛的な作品を発表していた村上三郎、同郷の金山明らとともに、グループ「0会」を結成します。同会では、墨を塗ったボールを投げつけて描いた村上の作品や、一本の黒い線で構成された金山の絵画など先鋭的な作品が生み出されており、白髪は昭和二十九年に開催された同会展覧会において、初めて足で描いた絵画を発表しています。

昭和二十九年、芦屋在住の吉原治良がリーダーとなり、



芦屋の伊藤継郎アトリエで 前列向かって右端が白髪一雄
(昭和25年頃、伊藤継郎アルバムより)



第1回具体美術展 昭和30年 小原会館／東京 向かって左から2人目
(大阪中之島美術館所蔵写真)

若い美術家たちをメンバーに具体美術協会（略称「具体」）が結成されました。吉原は戦前に二科会や九室会（きゅうしつ）で活躍し、戦後は芦屋市美術協会や現代美術懇談会（きんたんかい）に関わるなど、関西の前衛画壇を牽引した人物です。翌昭和三十一年四月、結成に参加していた嶋本昭三に勧誘され、白髪は村上、金山、田中敦子とともに具体の会員となりました。「精神が自由であることを具体的に提示」する、という思いが込められた具体は、「人のまねをするな、これまでにないものをつくれ」という吉原の言葉を受け、会員たちはそれまでの美術の概念にとらわれない独自性をもった新しい表現の作品を生み出していきました。



《どうぞお入りください》制作風景（芦屋市立美術博物館提供写真）

昭和三十一年、具体の会員となった白髪は第八回芦屋市展に絵画を出品。その夏に開催された「真夏の太陽にいどむモダンアート野外実験展」（芦屋川畔芦屋公園）では、白髪の代表作のひとつである赤い丸太組のなかで斧をふる丸太に切り込む作品《どうぞお入りください》を出品しました。以降、具体が解散する昭和四十七年まで白髪は具体展に出品を続けました。

白髪にとって芦屋の地は、伊藤継郎のもとでデッサンにはげみ、対象物をとらえるまなざしに磨きをかけた場として、また、吉原治良という師に出会い具体メンバーとともに自己の表現を追求していった特別な場所だったのです。

〔注〕

（一）『具体』創刊号（具体美術協会、一九五五・二）

〔執筆〕 大槻 晃実